

Title	ヒロインはなぜ悪魔になったのか？ : The Life and Loves of a She Devil 表象される〈悪魔〉を読み解く
Author(s)	松本, 祐子
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume29, 2015.3 : 65-78
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5520
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

ヒロインはなぜ悪魔になったのか？

— *The Life and Loves of a She Devil* に表象される《悪魔》を読み解く

松本 祐子

はじめに

イギリスのベストセラー作家フェイ・ウエルドン (Fay Weldon, 1931〜) の小説は常に読者を大胆に挑発する。男性優位の社会にあって、自らの無力さに悩み苦しみながら、滑稽なまでに懸命に生きていく哀れな女性たちの姿を描くウエルドンは、紛れもなくフェミニズム作家の旗手と言える。だが、ウエルドン自身は、なぜ男に対してそれほど辛辣しんろうになれるのかと問われ、「自分は男の姿をとがめも批判もせず、見たまま報告しているだけ」と答えている。ウエルドンの手にかかれれば、主役であるはずの女性たちも含めて、誰もががあるがままの剥むき出しに描かれることになり、多かれ少なかれ体裁を取り繕つくろって生きている我々読者は、目の前に磨き抜かれた鏡を突きつけられたかのように、時にいたたまれない気分させられることになる。

ウエルドンの視線は常に、矛盾に満ちた社会構造の中から弾き飛ばされた弱者たちの上に注がれている。だが、その弱者たちにしても、必ずしも読者の共感を呼ぶ人物であるとは限らない。 *The Life and Loves of a She Devil*

(1983) (邦題『魔女と呼ばれて』)²⁾の主人公ルースは怪物的と言つていいほどのアンチ・ヒロインであり、そのあまりに型破りでグロテスクな人物像は読者の度肝を抜く。ヒロインの造型を特異なものにする一方で、物語のあちこちにおとぎ話から借りてきたロマンチックなイメージがちりばめられている。ウエルドンが好んで昔話を下敷きにした作品を書いていることはよく知られているが、「女悪魔」ルースは、健気なヒロインにして悪意に満ちた敵役、さらには奇跡を実現する魔法使いの役割までも一手に引き受けて、世にも奇妙な変身を遂げることになる。

一 力の獲得

専業主婦のルースは、ハンサムで羽振りのいい会計士の夫と男女二人の子どもとともに郊外の高級住宅地の一等地にある新築庭付き一戸建てに住んでいる。その地区の名はエデン・グローブ (Eden Grove)、エデンの園ならぬエデンの森というネーミングで地上の楽園を連想させる。女なら誰もが夢見るバラ色の結婚生活が描かれるのかと思いきや、すぐさま、読者は肩すかしを食らう。たとえどんなに素晴らしい条件が揃っていても、それが幸福を約束してくれるとは限らない。ルースは実の母親からさえ疎まれるほど不器量で、はずみと成り行きで結婚した夫からはただの一度も愛されたことがない。そういう女に向けられる世間の目は蔑みに満ちて冷たく、夫は愛人がいることを隠そうともしない。ルースは出口のない不幸のトンネルの中でもがき苦しんでいる。

夫の愛人であるメアリ・フィッシャーは小柄で華奢な金髪美人、その上、売れっ子のロマンス小説作家でもある。特別な才能もなく、夫より一〇センチも高い一八五センチの長身を持って余し、牢獄にも等しい不格好な肉体の中に閉じ込められたルースの太刀打ちできる相手ではない。何ものにも縛られない、自由で自立したメアリ・フィッシャ

ーに較べて、ただ献身的で善良であるだけのルースはあまりにも無力だ。このように極めてデフォルメされた形ではあるが、物語の冒頭において、ウエルドンは、メアリ（マリア）とルース（ルツ）という聖書で馴染み深い名前を持つ二人の女たちに、現代社会に存在する典型的な二種類の女、即ち、持てる者と持たざる者、奪う者と奪われる者、生まれながらの勝者と敗者をはっきりと色分けしてみせる。

だが、フエイ・ウエルドンの創り出した狂気に満ちた喜劇的パラレル・ワールドの中で、この恐ろしく不公平な力関係は、ルースの覚醒とともに魔法のように覆されてしまう。覚醒のきっかけは、夫のボツボから「女悪魔」（a she devil）と罵られたことだった。ルースは、ならば、言われた通りの女悪魔になってやろうと決意するのだが、この衝撃的な意識革命が自発的なものでなく、社会的に自分より優れている「はず」の夫に「女悪魔」と名付けられたことをきっかけにしていることこそ、実に象徴的であると言える。神からこの世のすべてのものに名前を付けるよう命じられた男アダムの末裔であるとは言え、名前にBばかり三つも入ったB級の男ボツボ（Bobbo）には、アダムに与えられていた権威など微塵も感じられない。そんな凡庸な夫に「おまえは女悪魔だ」と決めつけられたから悪魔になってやるといふ姿勢は、「従順な妻」であることを口実とした究極の責任転嫁に他ならないが、きっかけはどうあれ、それは新しいアイデンティティーと力の獲得であった。夫と社会から蔑まれ虐げられて、不幸で惨めだったこれまでのルースは死に、束縛ばかり多かった妻・母から脱皮して生まれ変わった女悪魔は喜びに満ちて謳う。

I want revenge.

I want power.

I want money.

I want to be loved and not love in return.

一般に、社会的に健全と見なされる主婦は自らの欲望を剥き出しにしたりはしない。自分の個人的な欲求は二の次にして、愛情ゆえに家族のために尽くすことこそ、良き妻に求められる資質なのである。だが、あえて愛情と良心を捨て、憎悪と欲望に身を任せることで、ルースは計り知れない力を手に入れる。女を弱くするのは良心と義務感、そして家族への献身。巧妙なウエルドンが我々読者の前に呈示するのは、あまりにも明快な論理だ。どんなに努力しても、決してシンデレラのガラスの靴を履くことのできない肉体に生まれついた以上、清く正しく生きてさえいれば、いつか必ず白馬の王子様が迎えに来てくれるなどという夢物語は、論外の幻想に過ぎない。「醜いアヒルの子」は、ほとんどの場合、いつまで経っても醜いまま、それがこの世の道理というものなのだ。ルースの達した結論は、「世の中を変えることはできないから、私自身を変えてやる」というものだった。今や冷血の女悪魔となったルースにできないことは何もない。ルースは、シンデレラのような小さな足を持ち、ラプンツェルのような金髪をなびかせて海辺の塔に住む「可憐な姫君」^{かれん}「メアリ・フィッツシャーを破滅させ、もはや愛してもいない夫を取り戻すという遠大な計画に着手する。かくして、受身的な女性性を前面に押し出した痛快なサクセス・ストーリーが幕を開けるのである。

二 女悪魔の戦略

「女悪魔」になったからと言って、ルースがいきなり超自然の魔力を手に入れるわけではない。この作品はファンタジーの雰囲気の色濃く漂わせながら、物語の展開はあくまでリアリズムの枠内に止まっている。シンデレラならざるルースの前には、杖の一振りでも奇跡を起こしてくれるフェアリー・ゴッドマザーが現れることもなく、ルースはすべて自力でこつこつと緻密にして周到な復讐計画ふくしゅうを実行することになる。まず、過失を装って、エデン・グローブの夫の家を全焼させ、二人の子どもたちをメアリ・フィッシャーに押しつけて、自分は夫の前から姿を消してしまふ。その後は徹底した無名性を押し通し、復讐者として名乗りを上げることもなく、夫のボツボもメアリ・フィッシャーも自分が復讐のターゲットになっていることに最後まで気づかない。ボツボとメアリ・フィッシャーの没落は、自業自得、あるいは天罰としか思えないほど自然な成り行きをなご迎えることになる。並の復讐者であれば、相手に自分の優位性を思い知らせて満足感を得るために己の存在を誇示したくなるだろうが、女悪魔ルースは名乗り実を取り、闇に潜む影のごとく身を隠したまま、相手に防御の機会さえ与えない。あるいはそれは、取るに足りない存在として社会から徹底的に黙殺されてきたルースの身につけた最強の処世術であり、女悪魔としての矜持きやうじですらあるのかもしれない。

ルースは介護や看護、事務補助などのいわゆる「女性的」な仕事をしながら、着実に復讐の目的を果たしていき、やがて女性専用の職業紹介所を設立、社会的に虐げられた無名の私たちのエネルギーを利用して、巨万の富を得ることに成功する。私たちの持つ潜在的な能力を巧みに利用しているとはいえ、それは決して搾取ではなく、女性

ならではの発想で配慮の行き届いた理想的な労働環境を整えたルースは、紛れもなく、尊敬され感謝されるに値する立派な社会事業家なのである。報われない人々の悩みや苦しみを知り尽くすルースは、人々の心に巧みに囁きかけ、意のままに操ってしまうのだが、そんな悪魔の所業がすべて人助けになり、ポツポとメアリ・フィッシャー以外の人々をことごとく幸福にするという皮肉な展開である。大きな富を得てからも、ルースは相変わらず、自らは表舞台に出ないまま、それでも次第に社会の階層を上りつめてゆく。取るに足りない無名の家政婦として、周囲の警戒心を喚起することもなく、無防備な権力者たちの懐深くに潜り込み、「悪魔の囁き」で洗脳し、彼らの倫理観、正義感、良心の呵責を鈍化させ、その権力を自らの目的のために行使するのである。判事、神父、医者など、社会的に力のある男たちは、自分がルースに利用されているとは夢にも思わず、それでもルースの不思議な説得力と包容力にどっぷり浸かり、ある意味、高いステイタスから生じるストレスや束縛から解放され、癒やされ、幸福感に包まれて、ルースに溺れきってしまう。結果的に、現世の権威というものがいかに脆く儂いものであるかが暴かれる。女悪魔は男たちから権力を奪うことはないが、無名の弱者に偽装したまま巧みに彼らの力を利用することで、権力の座にある男たちの愚かしい思い上がりを嘲笑し、実体のない権威の失墜を図っているのかもしれない。

権力者たる男たちの力をほしいままに利用する一方で、自らの力を誇示することもなく、謙虚で控えめであり続けるルースは、互いの優劣に敏感な女たちを敵に回すこともない。一般に女性には、地位や学歴、財産、容貌、ファッションセンス、夫の肩書きや子どもの成績に至るまで、様々なレベルで互いを比較し優劣を競い合い、格付けしたがる傾向があるとされ、最近、日本のマスコミで、このような女性特有と思われる行動様式を「マウンティング」と呼ぶようになり、その巧みなネーミングが一つの流行語として巷の話題になった。こういった現象は現代の日本に限ったことではなく、*The Life and Loves of a She Devil*の世界にも似たような状況が確認できる。賢いルース

は決して相手の優位に立とうとせず、底辺の位置から相手の優越感をくすぐることで安心させ、取り込んで味方につけながら、その実、自分がすべてを支配するという状況を作り出している。男たちを相手にしている時と同様、やはり、宣戦布告も勝利宣言もない戦い方であり、戦いそのものが成立しているのかどうかさえあやしくなってくる。つまり、女悪魔はほとんど戦わずして、次々に圧倒的な勝利を収めてゆくのである。

三 聖女の誕生

ルースがヒロインと敵役の二役を演じるのに呼応して、ルースの憎悪の対象となるメアリ・フィッシャーにも、同様の二役が振り当てられる。最初は、善良な一主婦から夫を奪い、何の罪悪感もなく「幸せな家庭」を破壊する敵役だった彼女が、いつの間にか、女悪魔に苦しめられ、勝ち目の戦いを懸命に戦い抜く哀れなヒロインに変質してゆくのである。メアリ・フィッシャーはルースのコンプレックスを大いに刺激する存在であった。小柄で華奢な金髪美人である彼女は、正におとぎ話のヒロインに似た外見を持ち、ロマンス小説の作家として、多くの（不幸な）女性たちに「夢」あるいは「嘘」を売りつけることで富を築いた。ロマンスなど幻想に過ぎないことをいやと云うほど味わったルースは、夫を奪われたことにも増して、メアリ・フィッシャーが世間に嘘を撒き散らしていることが許せない。ルースの復讐は、メアリ・フィッシャーに現実の苦さを思い知らせてやることだった。自由で気儘な恋多き女であったはずのメアリ・フィッシャーは、ルースの策略によって、ありとあらゆる束縛の中に引きずり込まれてゆく。復讐計画を実行するためにルースが用いる手段は荒唐無稽なものだが、その結果としてメアリ・フィッシャーに降りかかる災難は、極めて自然な形で現れる。自立していたはずのメアリ・フィッシャーは愛のために一

人の男に隷属し、その男の子どもたちの面倒を見なければならなくなる。ルースの巧みな画策で介護施設から追い出された年老いた実母も引き取るはめになり、余計な仕事が増えて、たまりかねたメイドたちには逃げられ、家事のすべてを自分でこなさなければならなくなる。そうした家庭のしがらみに煩わされて、ロマンス小説執筆の仕事にも行き詰まるようになる。女悪魔ルースの復讐は、女の弱みを知り尽くしているだけに、これ以上ないほどの的を射たものとなるのだが、ふと気がついてみると、これらのトラブルは、女の受難としてはごくありふれたものに過ぎない。荒唐無稽の衣を着せて、フエイ・ウエルドンがさりげなく織り込んだ辛口のメッセージがそこかしこに見え隠れする。即ち、女を苦しめ、縛りつけ、無力にする悪魔の罠は、いくらでも転がっているのだと――。

メアリ・フィッシャーは、突然、降って湧いたそれらの束縛を拒否することもできずだった。事実、一九八九年にアメリカで制作された映画 *Slee Devil* (スーザン・シーデルマン監督) においては、メルル・ストリープ演じるところのメアリ・フィッシャーは、原作とは異なる運命を辿っている。ルースの復讐によって辛酸をなめさせられる展開までは同じだが、ある時点で、自分を苦しめる運命から逃げ出し、すべての責任を放棄してしまう。短期間の苦労体験をもとに新たな小説を書き、チープな大衆ロマンス小説家から重厚な社会派作家に転向して、むしろ、さらなるステップアップを遂げることになる。一方、原作のメアリ・フィッシャーは運命から逃げ出すことなく、雄々しくもすべての責任を背負い、名声も美貌も失い、その果てに病魔におかされ、力尽きて死んでゆく。それはルースの仕組んだ罠であったが、それ以前に、メアリ・フィッシャーは愛という名の束縛の中に自らはまり込んでしまっていたのである。女悪魔になるにあたって、ルースが目指したことは、「愛されても愛し返さないこと」だった。それが力を維持し、支配者となるための絶対的な方法であることをルースは知っていた。愛さなければ苦しむことも裏切られることもない。すべては、かつてのメアリ・フィッシャーと自分自身の生き方から学んだこと

だった。

愛のために力を失い、見る影もなく落ちぶれたメアリ・フィツシャーに、ルースはかすかな哀れみを感じている。立場が変われば、ルースがメアリであつたかもしれないし、メアリがルースであつたかもしれない。変えられない社会の中で力を得るために、あらゆる意味での自己改造を決意したルースにとっては、もはや「絶対の自分自身」などあり得ない。あるのはただ、こうありたいと欲望する主体だけだ。ルースは名前を捨て、好ましくない「自分」を形成していた個性を捨てて、生まれながらの「自分」とは違うものになろうとする。一方のメアリ・フィツシャーは、愛に殉じ、運命の悪戯いたづらによって降りかかってきた自らの義務を全うし、惨めに朽ち果てていく。だが、彼女が死んだ時、彼女を憎んでいたはずの老いた実母が、相変わらず憎まれ口をたたきながらも、娘のために哀惜の涙を流す場面がさりげなく差し挟まれている。フェイ・ウエルドンは、ルースの生き方が正しくて、メアリ・フィツシャーが間違っているなどと言っているのではない。ただ、愛すれば相応の犠牲を払わなければならないことを示しているだけだ。もちろん、女悪魔として生きるにも、それなりの代償は必要だ。愛なくして真の幸せをつかむことはできない。それを承知の上で、ルースは腹を痛めた我が子すら捨てて、愛よりも力を選んだ。どちらの選択が正しいか、答えは簡単には見つからない。フェイ・ウエルドンは、あえて常識的な倫理観の外にはみ出したヒロインを創造することで、まことしやかな社会通念に疑問を投げかけ、我々の型にはまった認識を根底から覆すのである。

四 自己破壊の衝動

強大な力を得た女悪魔ルースの復讐は、夫とその愛人を滅ぼすことに止まらない。「悪魔」の最終目的は、至高の神への挑戦である。ここにおけるルースの挑戦は、神によって与えられた自分自身の規格外れの肉体を破壊し、再創造するという形を取る。ルースは、自分たちは神のもともとの着想に改良を加えるためにこの世に存在するのだと言う。神が無残にも失敗した、正義と真実と美の創造を自分が行うのだと——。ルースの言葉は不遜きわまらないが、ある意味、不思議な説得力に溢^{あふ}れている。女悪魔になる前のルースは、世間の常識や夫の都合に振り回されながら、それでも律儀に社会のルールに従おうと懸命に努力していた。しかし、努力は何一つ報われなかった。だからこそ、生まれ変わったルースは、たとえ神であろうと、他人の意志には動かされまい、自分の人生は自分の意志で決定するのだと広言して憚^{はばか}らない。普通の人間は誰でも、神に与えられた自分自身と何とか折り合いをつけて生きていかなければならない。しかし、自らの力に目覚め、神に叛旗^{はんき}を翻した女悪魔ルースには、そんな儼^{むひ}の生えたような処世訓は通用しない。貪欲や虚栄は人間にとっては罪だが、悪魔には言わば、己の欲望に忠実に生きる権利がある。それでもやはり、今やどんなことでも実現できるほどの力を獲得したルースが、せっかくのエネルギーを、いかにも次元の低い美容整形のために浪費するのは、ある意味、滑稽なことかもしれない。美と若さへの憧れは多くの人間に本能的に備わっているものであるうが、美と若さに過剰に執着するのは浅ましく無様であり、往々にして嘲笑の的になってしまう。しかしながら、前代未聞の自己改造に取り組むルースの姿は、悲壮ではあっても、なぜか少しも滑稽には見えない。それは、目標達成を目指すルースが、まるで身を挺して偉大な使命を果たそうと

しているかのように、極めて真摯しんしでストイックな印象を残すからである。愚かしいと言われない大それた欲望を満足させるために、激痛に耐え、ストイックに努力する女悪魔——ここにもまた、ウェルドン一流のブラック・ユーモアがある。

ルースは夫とメアリ・フィッシャーに対して容赦なく復讐の鉄槌てつゐを振るつたが、新しく生まれ変わるために自身肉体に加える暴力の凄まじさは、桁外れの残酷性に満ちている。ルースにとって、変身に伴う苦痛はその先にある大きな喜びを約束するものであり、何か価値あるものを得るために代償を支払うのは当然であった。非常な痛みを伴うルースの変身には、アンデルセンの「人魚姫」のイメージが重ね合わされている。だが、男性を見上げることのできる背丈になりたいがために、果ては足の骨を二〇センチ近くも切り取るという狂気の大手術に挑むルースは、むしろ、王子の花嫁になるために小さな靴を無理やり履こうとして、自分の爪先、または踵かかとを切り落とすグリム版「シンデレラ」の意地悪な継姉たちに似ている。ルースが自分自身の肉体に加える破壊行為の荒々しさを見るにつけ、ルースの一番の憎悪の対象は、結局のところ、世間の美意識の基準からはみ出していた自分自身であったのかと思えてくる。ルースは長らく狭量な社会から精神的暴力を受けてきたが、女悪魔となった今も、実はその不完全な社会が女性に押しつけてきた「ヒロイン願望」から一歩も抜け出すことはなく、社会を変えることなく、ヒロインになれる自分を破壊し変質させることを選んでしまう。その選択には、歴史的、文化的に弱者である女たちが被ってきた心の傷の深さが反映されているようにも思えるのである。

所詮、ルースは女悪魔であって、高邁こうまいな志を抱く英雄ではないのだが、自らの意志で肉体を改造することによって、さらに強大な力を身につけることになる。ルースに驚異の整形手術を施す外科医たちは、自分たちはルースのピグマリオンであると自称する。自らの「被造物」であるルースに恋をしてしまうという意味においてなら、彼ら

がピグマリオンであるとする見方は正しい。しかし、厳密に言えば、彼らは決してルースのピグマリオンではないし、もちろん、フランケンシュタインでもあり得ない。なぜなら、ルースは彼ら男たちの手で意のままに創り上げられた人形ではないからだ。医師たちはむしろ、ルースの意志によつて操られ、その指示に従つて、与えられた役割を果たしているに過ぎない。尊敬され、感謝され、愛されることに慣れた腕利きの外科医たちは、競つてルースに恋をするが、ルースは誰にも愛を返さない。愛さないことによつて、ますます男たちから焦がれることになり、力を増していくのである。

おわりに

The Life and Loves of a She Devil は、最後に、この上なく奇妙な「ハッピーエンド」を迎える。今やルースは、死んだメアリ・フィッシャーそっくりの整形美女になつている。無謀な大手術を受けた足の痛みからは生涯、解放されることはないだろうが、望み通り、男を見上げられる身長も手に入れた。自分を裏切り軽んじ抑圧していた夫を罰して、力と財産を奪い尽くした挙げ句、無実の罪で服役までさせた後、圧倒的に優位な立場から、廃人寸前の夫を引き取り、ペットのように養つている。かつてメアリ・フィッシャーが暮らしていた海辺の塔の家を手に入れ、大金をかけて改修し、メアリ・フィッシャーの使用人だった美男のガルシアをわざわざ故郷のスペインから呼び寄せて雇い、メアリ・フィッシャーがしていた通りの優雅な生活を満喫している。メアリ・フィッシャーに対するこの執着ぶりは何だろうか？ どう見ても、そこにいるのはメアリ・フィッシャーであつて、ルースではない。原形を留めぬほどに自分の肉体を切り刻み、この世から抹殺することで、ルースは一種の自殺を凶つてしまつたかのよう

に見える。あるいは、聖母マリアの名を持ち、最後は聖女として死んでいったメアリ・フィッシャーの似姿を自分の肉体を使って再現することで、悪魔流の「復活」劇を自作自演してみせているのだろうか？

判事や神父や医師など、神の力の一部を託されているかのような男たち、言わば、神の代理人を気取った世俗の権力者たちは、女悪魔にまるで歯が立たず、意のままに操られ、情けないほど呆気なく陥落してしまった。つまり、地上の男など、たとえどんな権力者であろうと、女悪魔の敵ではないということだ。しかし、女悪魔がいかに挑発したところで、本当に復讐したかった神はついに姿を見せることはない。すべては女悪魔の独り相撲であつて、ルースは神に相手にもされていないのである。そもそも、ルースは最初からそんな展開を期待してなどいなかったのだろう。自分は神に殺されることはない、なぜなら、神は戦う相手として悪魔を必要としているからだ。だとルースは言う。悪魔の存在さえ神の計算のうちであり、ルースの言葉を受け入れるなら、神と悪魔は一種の「馴れ合い」とも言うべき共謀関係にあることになる。神が悪魔を必要としているとすれば、悪魔もまた、自己存在を維持するために神を必要としているはずだ。神を憎悪することで、常に神を求め意識してきた女悪魔ルースは、誰も愛さないつもりで、実は神に片思いし続けていたのかもしれない。その思いは永遠に通じることはなく、欲望のすべてを満たし、贅を極めた生活を手に入れた後も、ルースの人生にはぬぐいがたい空しさが漂う。

神には勝つことができないどころか、相手にさえしてもらえないが故に、女悪魔は世俗的な成功のみで満足するより仕方ない。「世の中は変えられないから、自分自身を変えてやる」と決意して復讐を始めたルースだが、そもそも、世の中は変えられないと頭から決めつけてしまった時点で、悪しき社会通念の犠牲者であると同時に、自分を苦しめてきた社会通念の作り手の一人として、加害者になってしまったとも言える。もちろん、ルースはすべてを承知した上で恐るべき自己破壊に着手した確信犯であった。社会的弱者である個人が手っ取り早く勝者になるた

めには、姑息こまぐとも言うべき非常手段に訴えるしかないことを身をもって証明したのである。この無謀で哀れな女悪魔を我々は肯定することも否定することもできない。ルースと同じ空しさと自己矛盾を抱えながら、我々は現代社会を生き続けるのだ。

注

- (1) 現代女性作家研究会編『フェイ・ウエルドン——魔女たちの饗宴』現代イギリス女性作家を読む1（勁草書房、一九九一年）、二七頁。
- (2) フェイ・ウエルドン『魔女と呼ばれて』森沢麻里訳、集英社文庫（集英社、一九九三年）。
- (3) Nancy A. Walker, "Witch Weldon: Fay Weldon's Use of the Fairy Tale Tradition" in Regina Barreca ed., *Fay Weldon's Wicked Fictions* (Hanover and London: University Press of New England, 1994), p.9 参照。
- (4) Fay Weldon, *The Life and Loves of a She Devil* (1983; London: Seprre, 1984), p. 49.
- (5) 「マウンテイング（女子）」という言葉は、二〇一四年の「ユーキャン新語・流行語大賞」にノミネートされた五〇語のうちの一つである。

（本稿は二〇一四年五月二八日の「キリスト教と諸学の会」での口頭発表を元にしたものである。）